

日本サッカーの若手育成における問題点 -「育成システム」と「Jリーグ選手の経歴」の観点から-

The problems of cultivation about Japanese football

1K04B183-5

樋口 智洋

指導教員

主査 堀野博幸先生

副査 矢島忠明先生

I. 序論

近年、日本サッカーのレベルは上がってきており、FIFA ワールドカップ™にも1998年フランス大会以降3大会連続出場を果たしている。しかし、ワールドカップでは、2002年日韓大会でグループリーグは突破したものの決勝トーナメント初戦敗退、1998年フランス大会と2006年ドイツ大会においてはグループリーグ最下位と世界トップレベルとの差は顕著である。

日本が本当の意味でレベルアップし、財団法人日本サッカー協会(以下JFA)が掲げる2015年世界トップ10、2050年ワールドカップ優勝という目標を達成するために必要なことを、「育成システム」、「Jリーグ選手の経歴」の2点から調査し、これからの日本の若手育成において進むべき方向性を示唆する。

II. 調査1

「Jリーグアカデミー」「トレセン制度」「JFAアカデミー」をフランス、イングランドの育成システムと比較した結果、両国とのさまざまな相違点や共通点が見られた。

JFAアカデミーはフランスの国立サッカー学院を踏襲している点が多い。一方で、JFAアカデミーの学校との関係はイングランドのアカデミーに近い。さらに、イングランドと日本では類似した制度が多く、イングランドの育成システムは日本にとっては大きなヒントになるはずである。

このように日本の育成はフランス、イングランドの双方のシステムから、日本の文化や教育の現状に合った実現可能なものを取り入れているが、フランス、イングランドに比べ、日本の育成システムは一貫性がなく、システムとしてそれぞれにつながりがない。イングランドのように各クラブに段階をつけ、有能な選手はより上のクラブにスカウトされ、選手のレベルに応じてステップアップしていくというシステムのほうが合理的である。

III. 調査2

Jリーグ在籍選手のうちU-15、U-18、U-22(「大卒選手」)の所属チームが明確な選手1103人の各年代とプロ入り初年度の所属チーム、プロ入団年、A代表出場歴の有無を調査した結果、所属や高卒/大卒別にさまざまな差異が存在していることが明らかになった。

現在日本でプロサッカー選手になる道としては大きく①『『生え抜き』選手になること』と、②『『U-15クラブ』から『高校』の2つに大別でき、どちらも一貫指導が受けられる。現在増加傾向にある「大卒選手」の多くは中学から大学まで部活動に所属していた。これは、一貫校を除いて、中学・高校・大学と、ぶつ切りの指導を受けているということである。

JクラブやJリーガーの増加によって、現在J1とJ2には大きなレベル差があると推察される。国内で常に拮抗したゲームが行われ、だれが日本代表に選ばれてもおかしくない状況を作る必要があり、これには一貫性のある指導によるサッカー界全体のレベルアップが不可欠となる。

IV. 総合考察

今の日本にはフランスのように国内全体で一貫指導ができるシステムを作ることが望ましい。各地域にJFAアカデミーを設置し、これを中心に地域全体でサッカーを盛り上げる意識を持つ必要がある。このためには、イングランドに習い、U-15年代のクラブに段階をつけ、各クラブの方針やレベルが入団希望の子どもたちにわかるようにし、選手のニーズに合ったチームを紹介できるようなシステムにすると良いと思われる。

その他、一貫指導を受けている選手を減らさないこと、高校生のうちに選手にセカンドキャリアについての意識や知識を持たせること、JサテライトリーグをU-22化し、サテライト所属選手と共に大学生を在籍させることなどによって、育成年代におけるチームの選択肢を増やし、一貫指導を促進できる。

今後は、世界各国の育成の現状の調査をすることで、日本の育成のあり方を見出せる可能性がある。日本の現状においては一貫指導の新たな可能性を模索する必要がある。そして、日本の現在のシステムをもとに進歩していけば、日本型一貫指導システムの構築に近づくことができるだろう。

V. まとめ

「日本のサッカー」と日本型一貫指導システムを確立することにより、日本人のサッカーに対する愛が深まり、日本サッカーが発展し、日本人のクオリティオブライフが高まることを願う。